

よね。

(加藤吉) あ、1人ではなくて、複数の先生方で行っているみたいなんですよ。

(鹿島) 池田重雄先生なんかいらした感じも。

(加藤吉) 大勢、行っておられますね。

(鹿島) ああ、そうですか。

(加藤吉) 10月30日、茅ヶ崎、藤沢、3人ずつですか。茅ヶ崎は2人、藤沢3人。



(神谷) 当時の子供にしてみれば、そういうもの以外にこう何か、楽しみみたいなものはあったんでしょうかね。

(鹿島) もう生きる為に、皆キュウキュウとしていたように思えますけれども。90%が農家の子供でしたから、出征してお父さんはいない、お兄さんはいないとね。生活の中で働いていかなければなりませんでしたから。明けても暮れても家のために働くという。やはり、国の為にと、そういう自覚を持って働いておりましたから。生きることに、真剣だったように感じますけれど。楽しみとか娯楽っていうような事は、頭に無かったんじゃないかしらと思います。

(歌田) そういう事を考えると、すぐに国賊みたいに使われて。何でも、ひたすら前向きに努力してしないと。娯楽に対する関心は、殆どは無かったような気がしますね。

(鹿島) もう、終戦が近かった19年、20年というと、生活も労働力もそれこそ窮屈でみんな歯を食いしばって生きてきました。

(神谷) ひとつよろしいですか。結構、神社の祭礼に児童・生徒が行っているようですが、これはあの、地元の神社に限り、行っているんですか。

(鹿島) そうですね。全員早川に、早川の五社神社とかそういうところへ。早川が一番大きな社で、深谷の神社は学校の側ということで、あの2つだけです。生徒が全部参加したのはね。あとは、部落、部落に分かれて武運長久を祈るということで、戦勝祈願、4時には起きて行きましたね。

(加藤吉) 朝ですよ。神社ですから。

(鹿島) 参拝して、建国体操というのがあったんですよ。それを神社の境内で。

(加藤吉) それは出征する兵士がいた場合には、皆、見送りで行かれたのですか。長後の駅まで送るとか、そういうことですか。

(鹿島) 生徒はそこまでは行きませんが、神社までは。

(加藤吉) あと、あの、寒川神社に行かれたことは無いですか。

(鹿島) もう、空襲が度々あるようになった19年になりますと、空襲が心配ですから、そういう遠征するということは無いですね。早川と深谷神社だけだったように記憶しています。

(加藤吉) じゃあ、もっと前ですね。

(鹿島) そうだと思います。

(加藤吉) たまたま寒川神社の日誌を読んだことがあるんですけど、綾瀬小学校が行っているんです。昭和19年。

(鹿島) ですから、もっと前じゃないでしょうかね。19年には行った記憶はありませんね。空襲の危険で、途中で空襲になったら大変だということですね。

(加藤吉) じゃあもう、その頃になると、いわゆる今でいう遠足みたいなものは。

(鹿島) ありません。



見学旅行(昭9～16)

(加藤吉) その頃、遠足って無くなっちゃったんですか。

(鹿島) 17年頃かしら。16年が宣戦布告でしょ。池田先生、修学旅行に子供を連れていったというあれはございますか。

(池田) どこへですか。参加。

(鹿島) いや、あの、修学旅行。卒業旅行とか。

(池田) ありますけれども、この時はもうありませんね。19年はねえ。当時の記録も無いよね。前の年あたりはあったかもしれないけど。伊勢参宮、やっているんですよ。高等科2年の時、戦意高揚とか戦勝祈願とかなんか格好つけて。これは、その時は、学校単独の主催でなくてまとめたのあれだね。何校かを。あれは県がやったのかしら。県がやったのかもしれないね。何校かをまとめて修学列車を引かせて、伊勢参宮やっていますけど。私も1回行ってらんです。確かね。

(歌田) 私は、17年の時に旧制女学校の3年生だったんですね。その時、4年生が修学旅行だったんですよ。その時に、「修学旅行、今年が最後だから3年生でも希望者は行きなさい」と言われてね。私達のクラスから何人が希望して4年生の仲間に入ったんですね。関西旅行に。だけどね、戦時中だから何もなかったのよ。本当に、食べるものなんか、お菓子なんかどこにもないし、さきいかなんかが最高のご馳走でした。お店になんも売っていなかったのね。で

も一応、関西旅行として、奈良や京都を回るだけは回って来ましたけどね。宿でも、随分食べ物には寂しかったです。でもあの時、希望して行ったから行けたんだと、私達喜んでいましたけどね。あの時17年が、最後でした。3年生は希望者30人位だったと思います。もう18年からはね、修学旅行はありませんでした。

(池田) 19年からかなあ。切羽詰ってきてね。この前の日誌があれば良いんだけど。

(比留間) 今のね、安全対策のことだね、19年じゃないけど、終戦になって20年の8月15日に終戦になって。その後、女の先生は、アメリカが来るって辞められる方が非常に多かったし、また、あの、遠い方へ行っていらっしやる

方は地元の方へ編入する。足柄の城島(仮名)先生は寒川にいらしたけど、綾瀬の方へね。そういうような終戦後ですけど、20年か21年あたりにかけての、そういうような安全対策で辞めるかたが結構いました。この名簿見ても、綾瀬小の女の先生も終戦後、安全対策でかなり辞められておられるんだね。

(歌田) 終戦直後の事ですけれど、綾瀬小からの帰り、怖くてね。帰るときも男の先生と一緒に帰るのね。一人じゃ怖くて帰れないの。



当時の服装

ちょっと危ないと隠れるしかないの。だからね、行き帰りによくね、男の物の印半纏ってあるでしょ。私、あれを帰りに上にはおって、髪をなるべく短くして、男っぽい格好してズボンはいて。ちょっとみると女性に見えないようにしていました。だから、学校に近くなると着替えて、又学校を出ると、男物の男物のは印半纏をはおって通ったのを覚えています。怖くて。女性は皆、狙われたから。

(神谷) 8月15日に、ラジオ放送で玉音放送がありましたけど、それは皆さん、学校で生徒と一緒に聞いていたんですか。

(鹿島) 生徒は夏休みですから、おりませんでした。でも、玉音放送があるということで、職員は全部職員室で。

(歌田) 私あの日、日直だったのよ。もう、あの玉音放送を忘れない。「何か放送があるから、宿直室に集まるように」と言われて。

(鹿島) 塚原(仮名)先生は、放送を聞かれて本当に号泣された。ラジオ放送で、朝から重要な放送があるから、すぐ皆来て皆聞くようにって放送があったんだね。それで12時だったかね、皆宿直室に集まったんだね。

(歌田) その幾日か後にマッカーサーが厚木航空隊に來たのね。9月21日。あの時も、丁度、日直でいたの。ワァーって爆音がしてね。ちょっと職員室の窓から空を見てみたら、アメリカのマークが付いた飛行機が飛んで來た。

(比留川) 20年から21年にかけてですけど、丁度あの厚木の航空隊の方で物資を村民へ放出したんだけど、その時に予科練の服も放出しました。だから、綾瀬学区の男の子は、ほとんど予科練の服着ていましたね。ちよつと短めのね。終戦後は予科練の服がしばらく続いたんだね。着る物が無くて。

(鹿島) 貰った物は、着る物が無いから本当に良かったですよ。私達もズボンなんか貰ったね。

(歌田) 家の方は基地の近くで大変だったのよ。長期戦に備えて軍隊が、食料を全部、防空壕へ運び込んでいたのね。それはお砂糖だの、お米だの、長期戦に備えて軍隊が全部防空壕に保管していたの。だから、それを、終戦と同時に兵隊が引き上げて居ないから、バアーツと、進駐軍が来る前の何日かの間に地元の住民が皆で、防空壕へ取りに行つて了った訳。その内アメリカ軍が来て、アメリカ軍が引き継いだ結果、あるべき物資が無いということで、それで大騒ぎになったの。これは、この近くの住民が盗つたに違いないという事で、MPが通訳を連れてやつて来たの。私の実家は基地の近くでしょ、もう調べに来て大騒ぎだったんですよ。

(鹿島) その品は返したんじゃないのかしら。

(歌田) いや、返した人と返さない人と半分、返す人は4割位で。当時、物が無い時代だから、いったん手にしたものは絶対手放さない。後になって聞いたらね、皆、家に置いておくを取り返されるか

ら、畑に穴掘つて埋めたとか。だから返さない人がほとんど。家の父がね、当時地元の実行組合の組合長していたの。それで、皆が返さないから返せと言ってMPがね、通訳を連れて家へ来るの。そして我が家の古い土蔵を見てアメリカ人は、ここへ隠しておくのではないかと思つたようで、家の蔵の中へ入つて、蔵の中掻き回すの。昔の蔵の中つて電気が無いでしょう。その暗い中を毎日の様に来ては拳銃で突つき回したようです。

(池田) ああいう物資はね、確か隠匿物資つていったかな。名前をね。家の方のあたりからも、取りに行つた人もあるんですよ。地域には、全く白昼泥棒なんですよ。持つてき放題で。その内ストツプになって、綾瀬小学校のね、講堂一杯に、隠匿物資が集められました。あれは、今のお話と違うんじゃないかと思うけれど、全部村民にね、配布されたんじゃないかな。

(鹿島) 最後はね、橋口(仮名)さんが留守番でしたよ。また講堂から持つて行かれてしまうので。あとは、全部村民に放出して、皆さんに配られました。2学期になりましたらね、比留川先生がおっしゃるように、子供達が皆、7つボタンの軍服を着て、ブカブカので登校してきました。だってそれまで衣類が無いんですからね。皆、偉くなつちゃうわね。児童たちも、複雑な面持ちで机の前に座っていましたね。



（歌田） 家の近所の人達が持つて来たのは食糧とか灯油だったようです。しかし誰が何を持つてきたか、手元を見ていないから分からないのよ。だから、家の父親がMPに責められて、誰もが返してくれないと大変だからと。もう何遍も何遍も一軒、一軒説得して歩いたんだけど、何人もの人が返さなかった。だから、何遍も通訳連れてMPが家に来て、蔵の中掻き回したりして、うちの父を責任者として責めたようで、父は大変苦労したようでした。

（池田）あの、自分のことで恐縮ですけど、勤労奉仕とか、空襲による出席停止のような事が続いたんでね。高等科2年を受け持ってたね、こんな事をやっていると学問がちっとも進んでいかないと、とても心配しましてね、夜学をやったんですよ。校長黙認だったと思います。高等科2年生でね。結局は文化的な方だけで、科学的な方はダメだったけど。国語だけは消化してあげようと、こう思いましてね。国語の授業だけを、夜2時間やりました。今考えるとね、よく用田のあたりからやってきたなと。男子生徒だけ通ってきたね。男子ですけど、よく来たなと。で、父兄からも反発を受けないでね。幾日続いたかは分かりませんが、これのもっと詳しいことは大貫（仮名）さんに聞けば、幾晩位やったか、教え方が下手だったかなんとか、分かると思いますけどね。今の太貫（仮名）さんは、その当時の生徒なんです。そういうことがありました。自慢げな話で恐縮ですけども、天下広しといえども、夜学を小学校でやったというのは僕だけだろうと。

（神谷）なかなか興味深い話しが次々と出てまいります、予定し

た時間も過ぎましたので、この辺で今日のところは終わりにさせていただきます。みなさん、今日はどうも有り難うございました。

文中の氏名については、一部を除いて仮名とさせていただきます。

参考文献

- 「綾瀬町戦没者名鑑」、「綾瀬市史研究第六号」
- 「綾瀬市史民俗調査報告書1・早川の民俗」、「綾瀬小学校八十年史」
- 「綾瀬小学校創立百周年記念誌・くすのきとともに」
- 「学童疎開関係書類・綾瀬村国民学校長」
- 「神奈川県教育会五十年史」、「県教育史資料編第三巻」
- 「相模原教育史第二巻近代通史編」
- 「教育資料第四集 昭和十二〜二十二年 1 渋谷尋常小学校 2 渋谷村国民学校 3 渋谷町立渋谷 学校日誌抄稿」
- 「藤沢市教育史研究第二号」
- 「横須賀市教育史通史編」
- 「体験記念集・横須賀の学童疎開」
- 「国史大辞典」 吉川弘文館



後日手紙にて

「感 電 事 故」

昭和19年9月16日、午前11時50分頃事故発生。

前日15日、暴風雨となり学校周辺の木が倒れたり折れたり被害も出ておりましたが、夜のうちに雨も上がり午前中には薄日も出ていたと思います。土曜日でしたので、授業は3時間で終わり11時30分頃には掃除も終わっていました。学校では昨夜の嵐で電線が切れて道路に下がっているなど夢にも思っていないでした。当時綾瀬小学校より寺尾方面に向かう道路に面して（学校より百メートルくらい北と記憶しております）厚木航空隊に納入する豆腐屋さんがありました。ここだけは大豆も充分入り、二〇〇ボルトの電流も来ておりました。その電線が切れて道路に下がっていたのです。土曜日でしたので、豆腐屋さんも工場に来なかったのでしょうか。電流は流れっぱなしだったのです。

学校から3人の仲良しの児童が駆け出していきました。□□□、
、○○○○、小学5年生でした。（この生徒は、私が4年生の時受持ったのです。5年生の男組になりまして橘川重晴（故人）先生が受持たれました。が時折私の教室に遊びに来てくれました。□□□の父は出征しておりました。母と祖父母と弟（現在□□□家相續しておられる□□□さんで農業をなさっておられたと思います）

□□□が先頭だったのでしょう。下がっている電線を道路の端へ移そうとしたのです。二〇〇ボルトの電流です。即座に倒れてしまいました。之を見て○○○が「□□□、ふざけるなよ」と起こそうとして□の体に触れると、又ビリッとしたので、直ぐ離れた

そうです。2人の様子を見た

が学校へとんできました。

学校では橘川重晴先生が「竹竿、竹竿」と叫んで、それを持って走って行かれました。救急車などありません。電話も学校、役場、航空隊位だったのでしょうか。厚木航空隊に連絡して、その医務室へ連れて行くことになりました。自動車も比留川（八福）さんに1台しかなく、それをお願いしたと思います。

橘川重晴先生の「□、□」とその遺体に取りすがって涙なされた姿は、今も目に浮かんでいます。私も航空隊に行きました。家への知らせ、色々な使いはみんな自転車でした。父の出征中の葬儀で、何と父兄に申し上げたら良いのか、言葉もありませんでした。私は、まだ3人が元気良く「先生さようなら」と駆け出して行った姿が忘れられません。

昭和19年9月16日の日誌を見て話させて頂きました。既に五十数年が終わっておりますが、□□□の面影は色白の痩せ型で元気良く走り回っていた少年の姿なのです。

鹿 島 孝 子

